
お前に英雄教えてやる

中宮 鈴羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お前に英雄教えてやる

【Nコード】

N2536Z

【作者名】

中宮 鈴羽

【あらすじ】

どこにでもいる普通の青年『宇江田龍青』は中学時代からハマっていたオンラインゲームを通じて学校一の美少女『赤星優希』と出会ふ事になる。

そんな彼女の夢はヒーローになること。

2人は夢掴むために動き出した。

0ープロローグ

『地味』

聞こえは悪いが決して悪いことではない。
ただ派手とは違い目立たないだけだ。

勉強ができる。

運動神経がいい。

面白い。

お洒落に詳しい。

異性にモテる。

高校生生活における派手な要素は大きくいえばこの辺りだろう。

それ以外の者達は普通。

大きく分類してしまえば『地味』なのだ。

そしてそんな『地味』から抜け出したい者は皆努力をする。

原動力となるものは『目標』。

高校生くらいなら他人に公言するのは恥ずかしいが『夢』と表現してもいいのかもしれない。

そんな中、夢を——努力することを早々と諦めてしまった少年がいる。

『宇江田 龍青』

彼は過去に何度かの挫折を味わい努力する無意味さを味わってしま

った青年だ。

だから周囲から外れ者にされない程度の努力だけをして普通に、平凡に生活する高校2年生だ。

学校で授業を聞いてまずまずの成績を残し、体育もクラスメイトに足を引っ張らないくらいで活躍もしない。

人づき合いも無難にこな、熱狂的な趣味もない。

探せばどこにでもいる高校生だ。

普通に高校を卒業したら進学して就職をする。

出会いがあれば結婚して子供と嫁さんのために働き幸せに一生を暮らす。

そんな人生プランに不満はない。

寧ろ一般的な人生と見比べれば十分に価する人生だろう。

平凡であるが確実に見てとれる幸せ。

人生の差別はあれど民主主義の今なら確実に望める幸せ。

勉強もスポーツも諦めたことで手に入れられる『地味』な幸せ。

不満はない。

そう自分で望んだのだ。この『地味』な人生を。

なのに自分の選んだ道に満足がいつていない。

理由は分からず、漠然とした味の無い毎日を過ごしていた。

あの日、彼女と出会うまでは・・・

1・誓い

俺は『宇江田 龍青』。

高校2年に進級して1ヶ月経つ。

そろそろクラスメイトも気の合う仲間を見つけ始める頃だ。

類は友を呼ぶという言葉があるように大抵は似た者どろしがグループを組むのが普通だろう。

『勉強』『スポーツ』『お洒落』『ゲーム』『音楽』
内容は様々だ。

そんな中で俺が属したグループは何かというと。

『地味』

多分——いや絶対これで間違いない。

俺と一緒にいる佐藤と田中の長所を上げると言われたら。

・・・くそう。1時間考えても答えられない気がする。

でも、いい奴等なんだぞ。

けど俺の長所を言ってくれて聞いていたら2人も同じだろう。

大体が良くて中の上、悪くても下の上。

長所もなければ短所もない。

まさに『地味』な高校生活を謳歌している。

今度もその予定だ。

苦勞などしなくても面白楽しく生きる事は可能なのだから。

その頃の俺は本当に思っていた。

いや、本当は分かっていたのかも知れない。
自分を誤魔化し、ぬるま湯で生きる事を決めた俺を正当化するため
に。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

取り柄のない俺だが趣味といえるものは持っている。

オンラインRPG。

早い話MMORPGだ。

2Dの単調なグラフィックだけど豊富な職業と簡単そうに見えて奥
が深いのが人気で日本では多くのプレイヤーが遊んでいる。

これだけは中学生の頃から初めて今じゃトップランカーの仲間入りを
果たしている俺はここでは結構な有名人だ。

『有名人』いい響きじゃないか。

学校から寄り道せずに帰り、家の手伝いや、学校の課題をいち早く
終わらせゲームを始める。

これが俺の生活リズムになっている。

ゲームを始めた俺は一緒に冒険へと旅立つ仲間を探すため知り合い
がログインしているか確認する。

知らない人と冒険する事もよくあるが、やはりある程度気心が知れ
た人達と遊ぶ方がやりやすい。

「やっぱり皆ログインしてないか」

学校から自宅まで俺は自転車で20分程で通える距離に住んでいる。
中学卒業時に親の仕事で引っ越した俺は知らない土地で1時間以上

もかかる通学はしなくなかったので、自分の学力で入れる一番近場の学校に入学することにした。

勿論このゲームをより長くやるためだ。

けどやはり平日の夕方にログインしている奴は少ない。

だからこの時間帯は知らない人と適当に組んで遊ぶか、一人でいるケースが大体だ。

今日のは行きたい場所はなく、一人で時間を潰そうと考えているとログイン者リストに一人の名前が点灯した。

『Red Star』

呼び名は『Red Star』のRSを取って簡略した『アース』

アールエス

と呼んでいる。

拳一つで戦う格闘家の『Red Star』が使うキャラクターは短パンに臍が完全に見える短いシャツを着た露出度の高い女性キャラクターだ。

ちなみに俺は魔法使い。装備は緑で統一された三角帽子にローブ。一般的なイメージに近い魔法使いのキャラクターだと思う。

性別は男だ。

『Red Star』と知り合ったのは1年程前。

一人で冒険に出かけていた時だった。

森の中でモンスターを狩っていると俺は突然4人のプレイヤーに囲まれた。

PKというやつだ。

ここではプレイヤーがプレイヤーを倒すとアイテムを強制的に奪う事ができるのだ。

勿論モンスターからもアイテムを獲得する事はできるが、なかなか良いアイテムはでないものだ。

ならばと良いアイテムを持っているプレイヤーを狩る行為に走る。

これが『PK』だ。

現実世界でいえばカツアゲといった所だろうか？

流石の俺も現実世界ではカツアゲに遭った事はないのだが。

今にも襲いかかって来そうな相手に苦笑する。

4人は自分よりLvが低いと思われるが別に余裕がある訳ではない。負けを悟ったのだ。

魔法使いの長所は1にも2にも魔法である。それしかないと言った方が正しい。

だが魔法の種類は豊富で、会得している魔法によって様々な戦略を立てる事が可能なゲームだが、今みたいな多数を相手にする状況下に置いては自分を守ってくれる壁役が必要不可欠なのだ。

なにせ防御とHPが極端に低い職業だから、火力の高い相手に懷を許した瞬間決着がついてしまう。

格下の相手だから魔法を一撃喰らわせてやれば倒せるかもしれないが、連続して魔法は撃てない。

一人倒した所で残った3人が俺を倒すだろう。

交渉して被害を軽減する手段もあったが俺はしなかった。

こんな相手に下手にでる事を嫌った。トップランカーの最後の意地というやつだ。

襲いかかってきた相手の一人に魔法を一撃喰らせ倒してやった。

次は自分だろう。勝てない戦いだったが一矢は報いたのだから満足はしていた。

そう思いながら最後の抵抗で逃げ回るが、流石に3人相手に振り切るのは難しい。

一人のプレイヤーに捕まり負けを覚悟した瞬間、颯爽と新手が草むらの影から飛び出すとPKの一人を躊躇いなく殴りつけた。

豪快に吹き飛んだ奴は一撃で倒され消えていく。

スタート地点に戻ったのだろう。

『大丈夫か?』

俺もPK達も突然の出来事に啞然としている中、格闘家の彼女はチャットで俺に語りかけた。

慌てて返信する。

『無事です。ありがとうございます』

『ならば、2人は私が引きつける。その間に君は魔法で倒してくれ』
『了解』

簡単な打ち合わせの上に、個人通信用のチャットではなかったので相手にも作戦が知れてしまうが気にしない。

相手に作戦がバレた所で焼け石に水なのだ。

PKを一撃で倒した彼女は恐らく上位ランカーの一人だろう。

4対2の状況ならばまだしも、2対2の状況ではどうしようもない。形勢不利と判断した2人は撤退を試みるが彼女の方が速さも上手さも上だった。

逃げ道を塞ぎ、2対1で戦い始める。

『君に売られた喧嘩だ。君の手で決着をつけるといい』

戦闘中の彼女から余裕のメッセージが届く。

あくまで足止めをするだけで倒す気はないらしい。

俺は礼を述べ2人を片付けた。

『私はヒーローを目指しているからな。困っている者がいたら無条件で助けるのは当然だ』

戦闘が終わり改めて礼を述べた時に言われた一言だ。

己の拳一つで戦う英雄も珍しい気がしたが相手は恩人だ。何も言わ

ないでおいた。

ついでに言う性と性別は女性なのでヒロインである。

彼女も俺と同じく一人で狩りをしていたらしく、俺も暫くこの辺りで狩りをする予定だったので流れてパーティーを組むことになった。モンスターは左程強くないのでチャットをしながら戦闘を行っていた。

話す内容はゲーム経歴や、現実世界の簡単なプロフィールなどだ。

相手はゲーム創設時から始めている古参プレイヤーだった。

といっても開始されたのは5年前からで、中学1年生から始めた俺とは1年しか違わない。

年齢はなんと同年代だ。

初対面の人に年齢を聞くのは躊躇われたが、音楽がテレビの趣向が若者向けの物ばかりだったので思い切って聞いてみた。けど性別は流石に聞かなかった。

このゲームに関わらず、ゲーム人口はやはり男性の方が多い。

女性と聞いて眼の色を変え、積極的・・・もとい暴走気味にお近づきになろうとするプレイヤーもいるので基本的に聞かないようにしている。

このキャラクターみたくスレンダーで可愛い子だったら嬉しいんだけどなあ。

・・・男性だった時を考えてこれ以上は妄想するのやめよう。

キャラクターの性別によって変わるイベントもあるので、全てのクエスト（依頼）、イベントを見たい人は異性のキャラクターを使うのだ。

そんな訳で彼女と知り合うことができた。

接近戦主体の格闘家と遠距離主体の魔法使いのバランスの良さもあり、同年代という事もあって最近では一番よくパーティーを組んで

いる。

『やあ流星。ちゃんと世界の平和を守っていたか?』

『いや、今来たばかりで何もしていないよ』

個人用のチャットで『Red Star』が呼びかけてきた。

ちなみに『流星』は俺のキャラクターの名前だ。

単純に青龍を流星に変えただけだ。

彼女は特撮ヒーロー好きで会うといつも世界平和の為に尽力したか訊ねてくる。

最近では一種の挨拶みたいなものだ。

そして今日も彼女と世界平和を願ってモンスター退治に出かけて行った。

[illegible]

結局夕飯の時間まで2人で狩りをしていた。

戦果は大漁だ。

左程難易度の高くない場所だったのでトップランカー2人いれば当然の結果といえる。

人気のない湖の畔で獲得したアイテムの山分けする。

休息の意も込めてキャラクターを座らせた。

『今回も上々のデキだったな』

『流星とは相性が良いみたいだからな。今日も多くの悪人を成敗してやったぞ』

彼女の頭上に沢山の音符マークが咲きでている。上機嫌なご様子だ。敵はモンスターばかりではなく、某アニメキャラクター出てくるの敵などもある。

そういうのは大抵人型の敵なので、彼女は悪人と称し優先的に倒しに向っているのだ。

山分けが終わり、まだ時間があったので世間話を始めた。

相手は同世代であるが、何といっても俺は『地味』に分類される程の人物だ。

お洒落やデートスポットみたいな話には全く自信がない。

内心いつこのお題が上がってしまうのかビクビクしながらも彼女との楽しいお喋りをする。

今日の話題は進路に関してだった。

うん。高校2年生らしい話題でなによりだ。

要約すると彼女の父親は大学には行かずに実家の手伝いをして欲しいらしく、彼女はそれに難色を示しているみたいだ。

『別に実家を継ぐのが嫌いなわけじゃないんだ』

なら何が嫌なのだろうか？

ネット越しで直に対面してはいないが、相手は俺の気持ちを察してくれたらしい。

続きを語り始めた。

『流星。私はヒーローになりたいんだ』

この予想の斜め上の台詞に俺の思考は一時停止していた。

ヒーロー好きなのは知っていたがここまでとは・・・

特撮ヒーローが架空の存在なんて事は小学生でも知っている。

けど相手の表情は分からないが真剣に言ってる気がする。

『いいんじゃないか』

何て答えてよいか分からず適当に答えてしまった。

今、俺の顔が確実に引き攣っているのが分かる。

実際に相対していたらこの返答が嘘だとすぐにばれただろう。

『本当か!!』

俺の前向きな返答にキャラクターの周囲にキラキラと星が輝いている。

良心が痛む・・・。

俺の気持ちとは裏腹に勢いづいた彼女は立ち上がり、夕日に向かってビシッと指をさす。

『ならば流星。私はヒーローを目指す。手伝ってくれるか？』

努力をやめて適当に生きている俺と違い、ずれてはいるが真つすぐに生きる彼女を羨ましく思った。

嘆息して、俺もキャラクターを立ち上げらせ夕日に向かって指をさす。

『い い ぜ』

その時の彼女がどれ程の気持ちで公言したのか知るすべも無く、ただその場のノリで安請け合いをしてしまった。

[illegible]

2、出会い

髪は短めのウルフカットに顔は見事に整っている。

背は女性にしてはやや高めか。スタイルは細身で手足はスラッと伸びてモデルのようだ。

ありきたりな言葉だが、でも確実に今日の前に立っている女性は美少女と呼ばれるに違いない。

彼女は友好的に微笑み俺の前で立っていた。

「名前で呼んでたよね？」

「どうゆう仲なんだ」

教室にいる生徒は皆、自分と彼女を注目していた。

当然だろう。『地味』の二つ名を持つ俺には似つかわしくないほどの美少女が俺の名前を呼んでいるのだ。

しかも、かなり親しげに聞こえ最低でも友人未満ってことはないと思う。誰もが感じとれる。

だけど俺は彼女を知らなかった。

「どちら様でしょうか？」

どっかで不快な思いでもさせたのだろうか？

嫌らしい視線で見てたとか。

これだけの美少女だ。

あり得る。この線が有力だ！・・・ヤバイどうしよ。

俺の返事に彼女は一瞬、不満気な表情を見せた気がしたが人懐っこ

い笑みで手を差し出す。

「すまない。自己紹介がまだだったな。私はA組の赤星 あかほし 優希 ゆうきだ」

意味ありげな視線を送る彼女だが、理解できず少し首を傾げ握手するとそっと俺のそばに顔を近づける。

思わず鼓動が高鳴ったが、彼女は無視して小声で一言付け加えた。

「英語読みで」

英語読み？

何をもって多分名前だよな。それしか教えてもらってない。

ええと、赤星さんだったよな。

赤星………Red？

………え？

「アース？」

俺の疑問交じりの呟きに納得した表情を浮かべ頷いた。

「では来てくれ青龍」

「どこに行くん……ですか……赤星さん」

突然の事に思わずタメ口を使うところだったが、初対面しかも女性相手なので敬語に直す。

「今から職員室に行く——あと優希と呼んでくれ。私も龍青と呼ん

でいるからな」

まあ彼女が『アース』ならば確かに『流星』と普段から呼んでいるのだから違和感がないのかもしれないが俺は違う。

女性をそれも美少女の名前を呼ぶなんて免疫機能が備わっていないのだ。

「用意もあるので私は先に行ってる。まだ昼は食べていないから弁当は持ってきてくれ一緒に食べよう」

そう言い残して彼女・・・赤星さん（名前で言えない）は教室を出て行った。

宣言通り先に職員室へ向ったのだろう。

静まり返る教室。

視線が痛い。

男女問わず何か言いたげな顔で見ている。

確かに美人だったがそこまで大げさな反応をするものなのか？

相手が『地味』な俺だからか？

ああ、それならあり得るな。

宝くじで一等当たった人を偶然見かけたらどんな奴か知りたくなるよな。

「赤星さんと知り合いだったのか？」

『地味』友の佐藤が気を使ってくれたのか小声で質問する。

俺は首を横に振った。

「知らない。初めて会った」

実際は知っているが、直に会うのは初めてだったのでそう言った。

「佐藤は彼女の事知ってるのか？」

「知ってるもなにも・・・」

呆れた様子に少し恨めしげな視線でこっちを見る。
そんな有名人なん？

「2年A組。赤星優希さん。2年男子の人気アンケートでは毎回に3位内に入ってる。けど彼女は男女問わず人気があるから、2年生全員で投票したら1位は間違いないぜ」

男子アンケート。そんなのあったのか。

佐藤め何気に流行の波にのってるな。俺と同じカテゴリーのくせに。
「少し男口調だけど、明るくて誰とでもすぐに打ち解けるんだ。実は武道の道場で中学生の時、空手のJrチャンピオンになってる。性格も良くて、困っている人がいたら迷わず手を差し伸べてくれるんだ」

「佐藤お前・・・」

あまりに熱のこもった説明に顔が引き攣る。

去年佐藤は同じクラスだったらしく、その時に彼女が手を差し伸べてくれたらしい。

彼女からすればヒーロー道を則ったって所だろうが、佐藤はそれ以来ずっと慕っているみたいだ。

あんな可愛い子に助けてもらったらそりゃあ落ちるよな。

告白までは至ってないようだが、まあ学校のアイドル相手に告白できると俺達と一緒にはいないよな。

頑張れよ。とりあえず応援しておくよ。

それはさておき、彼女が『アース』だったとはなあ……

突然すぎて今一つピンとこないが、本人がそう言ってるのだからそうなのだろう。

そしてあの時語った夢は本気なんだろう。

約束して次の日に行動に移すくらいだ。

学校一の人気者ってことだけど、皆彼女の夢は知っているのだろうか。

知ったらどんな反応を示すんだろう。案外あっさりと受け入れられたりして。

既にある意味ヒーローみたいなものだからな。

そんな彼女は俺に何を手伝ってほしいと言うんだ？

寧ろ手伝うことなんてあるのかよ……

「行くのか？」

もう一人の『地味』友、田中だ。

こっちは案外冷静だな。

驚いてはいたようだが、広げたばかりの弁当を片付けるのを見て質問してきた。

「あの場で断れなかったし、行くだけ行ってみるよ」

どのみち周囲の視線で食事など集中できそうにない。

さっさと職員室へ向かってしまおうと思った。

3 一部の設立

俺は今、学校内の隅っこに建てられた物置部屋にいる。

元々は運動用具を保管する部屋らしいが、体育館の改装時に用具置き場が館内に作られてから全く使用されていない。

一年以上高校に通っている俺だが、この物置部屋には一度も入ったことはなかった。

床のタイルは剥がれ、電灯は所々壊れ使用できない。

そんな壊滅的な部屋だが不衛生ではなかった。

四方にある窓を全開にすれば部屋中に明かりは行き届き、掃除もされているようで埃もない。

強いて言えば元用具置き場だけあり、保管されていたのであろう今では誰も使用しないボロボロの体育用具があるのだが部屋の隅っこに纏められいつでも捨てる準備は完了されている。

部屋の広さは大体10畳ほど。

物置部屋だけにそこそこの広さである。

部屋の中心に場違いな明るめの絨毯を敷き、俺は弁当を食べていた。そして隣には学校一のアイドル（佐藤調べ）、赤星優希も持参したお弁当を食べている。

「すぐにでも活動を開始したい所だが致し方ない。まずはあの不要な用具を片付けてからだな」

「・・・おお」

目を輝かせ希望に満ちた表情で今後の計画を話す優希に気圧され気味だ。

何せ彼女が一刻も早くと願う活動とはヒーローになるための活動なのだから。

なにが彼女を突き動かしているのか。

この物置部屋は顧問の先生に掛け合って部室として使わせてもらう事になった。

部員は俺と部長の優希だけだ。

とはいえ俺は入部して初日。

未だ活動が分かっていないので、不安が募る一方だ。

いや、それ以前に『俵約部』っていったい何だ？

1	1	1
2	2	2
3	3	3
4	4	4
5	5	5
6	6	6
7	7	7
8	8	8
9	9	9
10	10	10
11	11	11
12	12	12
13	13	13
14	14	14
15	15	15
16	16	16
17	17	17
18	18	18
19	19	19
20	20	20
21	21	21
22	22	22
23	23	23
24	24	24
25	25	25
26	26	26
27	27	27
28	28	28
29	29	29
30	30	30
31	31	31
32	32	32
33	33	33
34	34	34
35	35	35
36	36	36
37	37	37
38	38	38
39	39	39
40	40	40
41	41	41
42	42	42
43	43	43
44	44	44
45	45	45
46	46	46
47	47	47
48	48	48
49	49	49
50	50	50
51	51	51
52	52	52
53	53	53
54	54	54
55	55	55
56	56	56
57	57	57
58	58	58
59	59	59
60	60	60
61	61	61
62	62	62
63	63	63
64	64	64
65	65	65
66	66	66
67	67	67
68	68	68
69	69	69
70	70	70
71	71	71
72	72	72
73	73	73
74	74	74
75	75	75
76	76	76
77	77	77
78	78	78
79	79	79
80	80	80
81	81	81
82	82	82
83	83	83
84	84	84
85	85	85
86	86	86
87	87	87
88	88	88
89	89	89
90	90	90
91	91	91
92	92	92
93	93	93
94	94	94
95	95	95
96	96	96
97	97	97
98	98	98
99	99	99
100	100	100

部室に行く前の事だ。

赤星さんの指示通り俺は職員室へ向かう。

「失礼します」

ノックして職員室に入り、軽く周囲を見回すと赤星さんが気付き手招きをしている。

近づく、と赤星さんの隣で座っている女性を見つめる。

確か、白菊先生だ。

名の通りの白い肌。

腰まで届く長い黒髪。

温和そうな笑みが特徴的な家庭科の先生だ。

俺が受けている家庭科は白菊先生ではなく50代のオバちゃん先生だ。

失礼ながら白菊先生が良かったな。

そんな風に思いながら2人のもとへ向い、軽くお辞儀して挨拶した。挨拶が終わると赤星さんは先生といった理由を話す。

「白菊先生は我が部の顧問になる。くれぐれも粗相のないように」

「良かったわね赤星さん。これでやっと部を立ち上げられるわね」

「これも先生のおかげです」

姉妹のようにハシヤグ2人に俺は状況を整理するのでやっとだった。

「こ、顧問ってどうゆうことですか？」

俺の質問に2人ハシヤグのを止め、先生は目を丸くして聞いてきた。

「宇江田君。赤星さんの作る部に入るんじゃないの？」

不思議そうに尋ねる先生をよそに赤星さんは一枚の紙を俺に手渡す。入部届けだ。再確認。

・・・うん。入部届けだ。

赤星さんの夢を叶える手伝いをするとその場の勢いで宣言してしまったが、入部となんの関係があるのだろうか。

突如渡された入部届けに困惑していると、ふと優希さんと目が合う。

「手伝ってくれるじゃなかったのか？」

気持ちが伝わったのかどこか不安そうな上目使いで呟く。
可愛いすぎるだろ、これ。

隣で先生が、女の子泣かしたみたいな顔で面白がっているし。
こんな俺に残された道など一つしかなかった。
嘆息して一言。

「・・・入部させて頂きます」

その瞬間、赤星さんの表情が明るくなる。

「そうか、良かった」

胸を撫で下ろし、俺の手をギュッと握りしめ笑顔を見せる。

学校一アイドルと称される意味が分かった気がする。

佐藤さつきは白い目で見てすまん。

こうして俺は入部することに決まったわけだが。

何か忘れてるような・・・あ！

「そうだよ。俺、何の部活に入ることになったんだ」

言った後に思ったが相当間抜けな台詞だよな。

先生は赤星さんを見る。

「もう決まってるの？」

「いくつかは考えてきました。龍青なにか良い部名はあるか？」

「何で俺に振るんですか？」

「部長として部員の意見も尊重してやらないといけないからな」

部長。そんな優しさいらないよ。

つうか何でこれから部活やるのに名前が決まってないんだよ。

活動目的決めて、目的に沿った部名決めて、部を創設するじゃないのか？

「お任せします」

「分かった」

やけくそ気味に丸投げしたが、気分を害した様子もみせず優希さんは思案する。

いくつか考えてきた言っていたので、どれにするか選んでいるのだろう。

「じゃあ『儉約部』でお願いします」

「儉約部？」

聞いたことない部名に思わず声が出てしまった。

納得のご様子の赤星さんに先生は

「なかなか良さそうな部ね」

本当ですか？

怪しむ俺だが、先生は本当にそう思っているようだ。

満足そうに頷いている。

赤星さんは先生と手続きを行った。

「よし終わったぞ」

「良い部活になることを祈ってるわ」

優しく微笑む先生。

「では、手続きも終わった事だし部室に行こうか」

「もう部室決まってるんですか」

「ああ、まだ片付いていないが一応部室としては使えるぞ。行ってみようか」

「いいですよ」

増々もって順序逆だ・・・

何と言っているのか分からない俺に優希さんは少し睨み

「龍青。先程から随分他人行儀だな。2人しかいない部員がこれでは上手くいくものも駄目になってしまふぞ。あと私の名前は優希だ」

一度も名前で呼んでいないことに気付いていたらしい。

『地味』男の俺に名前を呼び捨てなんてハードル高すぎるだろう。

じっと見つめて動かない彼女に大きく深呼吸して

「じゃあ、部室に行ってみよう。優希」

「では行こうか。龍青」

堅い表情を解いて見惚れるほどの笑顔で頷く優希の姿は暫く脳裏から消えない気がする。

4 一部室にて

人生初、親類以外の異性と2人きりで昼食を過ごした俺だったが、2人きりならではの甘く、浮いた話など一切なかった。

オンラインゲームで知り合って大体2年経つがゲームと同じ性格だったとしたら、その類の話は積極的に話さないだろう。

『男子力』Lv1以下でチュートリアルで対戦するくらいのモンスター相手に苦戦するだろう俺にとっては有難い話だ。もっとも『地味力』ならラスボスも一撃だろう。

隣で食事している優希の弁当を見る。

女の子らしいお弁当だと思いきや、箱の色は赤だが特に飾り気もなく男子と同じくらい大きめのサイズだった。

中身も質実剛健というか男性が好む感じのおかずだ。

個人的には好きな弁当であるが、色鮮やかなおかずを中心に少量のご飯というのが俺の持つ女性のお弁当のイメージだ。

意外に思っていると頬をほんのり赤く染めた優希が弁明する。

「し、仕方ないだろう。私の実家は道場で、住み込みの門下生には学生もいるんだ」

慌てるように早口で話す。

用は住み込みの門下生さんに作った弁当と同じ物を持ってきているらしい。

「へえー。偉いな」

「そ、そうか」

安堵の中にちょっとした自慢を覗かせる。

女子の学校生活にとってお弁当は一つのステータスみたいなものだと思う。

このお弁当可愛いねとか、彩が綺麗だとか、そんな感じの内容を話すらしい。

俺の妹がそうだった。

母親がお弁当を作る時間がなく俺のお弁当と同じ感じの内容になったら、駄々こねて泣いていた。

そして俺も泣きそうだった。

そんなに嫌か兄の弁当・・・

それを考えれば優希の行動は立派だと思った。

「一番早く出ていく人が7時前だからな。毎日支度するのが大変なんだ」

「優希が作っているのか」

「ああ、母親は既に他界しているからな——気にしなくていい。私が物心つく前の話だしな。親不孝者と言われるかもしれないが、家に帰ったら門下生の人も多くていつも賑やかで気を使ってくれたから寂しいと思った事はないんだ」

不味いこと言ったと思う俺に明るく話してくれるが無理もしていない感じがした。

「それに母親変わりってわけじゃないが麗子さんもいるからな。家事に関してあまり負担はないんだ」

「麗子さん？」

「白菊先生だ。母方の親戚なんだ」

驚く俺。それであんなに仲よかったんだな。

職員室では随分親しげに話していたからな。

こんな意味不明な部に協力してくれるのも納得だ。

すると先生は

「先生は優希の夢を知ってるのか？」

「知ってる。でなければこんな馬鹿げた部を認めてくれないだろう」

もったもな話だ。というより馬鹿げた部だと理解してたんだな。

「ならばもっと単純に英雄部とかでも良かったんじゃないか？」

疑問を投げると優希は呆れたように見やる。

「どこの世に正体をばらすヒーローがいるんだ。ヒーローは絶えず弱者を影ながら見守り、悪人を成敗していくものなのだ」

「もしかして『候約部』なんて部名にしたのは」

「勿論カムフラージュだ」

だから部名に拘りがなかったんだな。

「ついでに言うと、人が寄り付かなそうな部名が好ましかった。そういう意味では『候約部』なかなかの力作だと思うぞ」

確かに、パツと見た感じこんな部に入ろうなんて思わないよな。

「それでも、入部希望者が来た場合どうするんだ？」

可能性が0ではないので一応確認してみた。

優希は肩を竦める。

こんな部に入るとは思えないと言いたげだ。

部長としてそれはどうだろう。

「とりあえずは表向き『俵約部』として活動する。そして面白みのなさ最大限にアピールして退部してもらおう」

酷い話だが、面白みのない部としては同感だった。

「まずは先程言った通り部室の片付けからだな。あとは『俵約部』に必要な用具を最低限購入。あと部員は素質のありそうな人がいれば勧誘だな」

「この部に必要な素質って」

「無論。ヒーローになれそうな人だ」

・・・俺該当してなくない。

もしかして部員集まったら俺必要なくなったりして。

「今後の予定はそんな感じでいく。質問はあるか？」

「じゃあ一つだけ」

優希は無言で促す。

「何で俺が『流星』だって分かったんだ？」

オンラインゲームでしか出会ったのにどうして知ることができたのであろうか？

慌ただしすぎて忘れていたが、昼食中に頭の中を整理してた時に気付いた。

俺の疑問に優希は淀みなく答える。

「クラスメイトの佐藤君とゲームの話をしていただろう」

「そういえばした事あるな」

2年になって間もない頃だ。

佐藤と知り合ってゲーム仲間を増やそうと話題にした事があった。じゃあ優希はその頃から知ってたのか。

そうとは知らず、チャットで色々と話してしまった気がする。

自分の過去とか、友達とか・・・好きなタレントも言った気がする。

赤面したのが分かった。

それを見た優希は悪戯な笑みを作り

「これから部活中はピンクのリボン付けてやろうか？」

「やめてくれ！」

思わず声を荒げてしまったが、優希は楽しそうに笑っている。

ちなみにピンクのリボンは俺の好きなタレントがいつもしているトレードマークだ。

くそう。完全に力関係が出来あがってしまった気がするぞ。

俺も優希と色々話してきたはずなのに弱みを握れるネタが一つもない。

ここ数ヶ月で話した内容を必死に洗い出していると優希は立ち上がった。

「もう昼休みが終わる頃だ。もう質問はないな」

「そんな時間か。大丈夫だ」

早かったな。のんびりしている暇すらなかった。

「では最後に、いつかは発覚するだろうが、当面は部を立ち上げた事は秘密にしておこう」

「何でだ？」

別にばれても構わないよう『検約部』を立ち上げたのだから隠す必要ないんじゃないかと思うが。

優希は困ったような難しい顔で躊躇いがちに「麗子さんが言ったんだと」と強く念を押す。

「自分で言うのも何だが私は結構な美少女だそうだ——憐れむ顔でこっちみるな！」

「だってなあ」

否定はしない・・・いや肯定すべき内容だが、さすがに本人の口から聞くと虚しさを覚える。

優希は俺の視線を振り払い話を続ける。

「故に部の宣伝をしたら、部の活動内容に関わらず募集してくる人が増える可能性が高いそうだ！」

半ばやけくそ気味に怒鳴って説明する。

確かに優希目当てに入部してくる可能性も高い。

そうなると自然と彼女の夢も遠退くか。

「ん。分かった」

「よろしい！」

顔を赤くした優希は誤魔化すように強引に話を切った。

「じゃあ今日会った事は何て説明する」

「ゲームで同じ学校の人だと分かったから声かけてみた程度でいいんじゃないか？」

嘘はついてないし問題ないだろう。

優希の意見に頷いた。

「では龍青。これを渡す」

一枚の青いバッジを手渡された。

「これは」

「正式な『儉約部』に渡そうと考えていたバッジだ」

得意そうに優希は自分専用の赤いバッジを見せる。

「この真ん中に描かれたロボットは？」

「私が設計した合体ロボだ。強いんだぞ」

シャドーボクシングみたくパンチを繰り出し、クオリティの高いロボットの絵に満足そうに自慢する。

ヒーロー目指すってそういう方向性なのか・・・

いつの日か5人集まったらポーズみたなのをとらされるのだろうか？
うわぁ。想像しただけで嫌だ。恥ずかしい。

「どうした龍青。顔色が悪いぞ。まだ我が部は始まったばかりなんだ。そんな情けない恰好を見せていたら夢は叶わないぞ」

「・・・そうだな」

元氣一杯の優希に相槌するのがやっとだった。

5 一凡才

昼休み終了の鐘が鳴ると同時に俺は教室に入った。

理由は簡単だ。

クラスメイトに優希との関係を聞かれるのが煩わしかった。

特に佐藤は優希に気があるみたいだからな。

急な展開に動転している俺もいるので少し心を落ち着かせたかったし。

授業中何人かの男子生徒がこちらをちらちら見ていたが勿論無視する。

大人しく授業を受ける俺の成績は悪くもなく良くもない、普通つてやつだ。

天は二物をを与えずというが、俺は一物も与えられていない気がするが気のせいかな？

中学の頃はテストの成績順位が廊下の壁に発表されるので、一時期必至に頑張った記憶があるが結局1位の奴を抜くことができなかった。

しかもそいつは彼女持ちで、テスト期間中も真剣に勉強せず遊んでいるような奴に負けたのだ。

世知辛れえ。

運動もそうだ。

俺は小学生の6年間ずっと地元の少年野球クラブに所属していた。

6年生の時にレギュラーを勝ち取りサードで3番だった。

あの時は嬉しかったなあ・・・

けど長く続かなかった。

夏休み期間中に一人の少年が引越してきた。

彼は他の強豪チームで4年生からレギュラーをしていたらしい。

そんな彼の守るポジションは俺と同じサード。

サードは一つしかないポジションだからレギュラーは2人のどちらか。

夏休み中俺は毎日素振りして、監督にノックしてもらった。

当時では一番の頑張りを見せたと思う。

監督も俺の頑張りを褒めてくれ自信に満ちていた。

そして夏休みが終わり初の対外試合。

俺のポジションはベンチだった・・・

努力する事は必要だろうが、結局は才能がものをいうのだと俺はこの時認識した瞬間であった。

世知辛れえ。

中学で勉強で負けて以来、努力することを止めた。

夢を持つことも止めた。

変哲もないただの一般人でいいと思った。

嫌な過去を思い出した俺は大きく嘆息して、授業中にも関わらず机に突っ伏した。

俺に才能ってあるのだろうか？

——この部に必要な素質って

——無論。ヒーローになれそうな人だ

部室で会話した内容を思い出す。

優希は俺の持ち得なかった運動も勉強もこなせるらしい。

男だったら一生口聞きたくない相手だな。

けどそんな彼女の夢はヒーローになることだ。

今時子供でも言わないだろう。しかも少年みたく目を輝かせて。机に額をつけたまま俺は苦笑する。

夢を諦めた俺は再び歩き始めることで『何か』に変われるのだろうか？

さすがに職業ヒーローとは大っぴらに公言したくないが、夢を持つ彼女が羨ましく思えたのは確かだ。

流されるままに入部してしまった『儉約部』。

もう一度、もう一度だけ、あの時失った思いを蘇らせてみたいと思う俺がいた。

6 一腕相撲

本日の授業が終わりホームルームを待っていると、やはりと言うべきなのかお昼の出来事について詮索してくるクラスメイト。

照れながらも自称モテる（実際は白菊先生の見立て）と言い切った優希だが嘘ではなかったと証明される。

佐藤はともかく普段話すらしていない奴も近寄ってくるのには少々イラッときた。

変に慣れ慣れしく話かけてくるが「何でお前が優希さん」と言いたげで見下されている感じがした。

怒りをぶつけてやりたい衝動に駆られたが、感情に任せて問題を起こしてしまったら目も当てられない。

ここは優希と打ち合わせ通り「ゲームで知り合った」と主張した。何のゲームか教え欲しいと言う奴もいたので教えてやる。

だがトップランカーの彼女が昨日今日始めた初心者が肩を並べるわけもない。

きっと並んだ頃には卒業だ。それ位の時間が必要だろう。

初めはゲームをネタにお近づきになろうとする輩も考えたのだが、優希に一笑された。

「下心で近づく奴に興味はない」

さすが優希さん男らしいぜ！

そんな訳で何とか納得してもらい教室から去ることができた。勿論向かうのは自宅、ではなく部室だ。

部屋に入ると既に優希が来ており、隣には顧問の白菊先生もいた。部屋の隅っこに寄せていた廃棄用具の前で俺達は集合した。

「早速行動に移そうと思うが、まずは役割分担を決める。一人は部の用具を買い出しに行き、もう一人はこの片付けだ」

「私もここで片づけをさせてもらおうわ」

優希が本日の予定を告げる。

先生は片付けを手伝ってくれるそうで、俺は当然の如く力作業である用具の片付けを担当すると伝える。

「二応、人並み程度の体力はありますよ」

なんだって俺は上でも下でもない『地味』な存在だからな。
 だが優希は素直に頷かず思案顔で腕を組んでおり、先生もどこか哀
 れんでいるようにも見えた。

なんで？

不満に思うよりこの反応に首を傾げていると、優希は何か思いついたように不要備品の古びた勉強机を一つ取り出す。

優希は表面を軽く拭くと中腰になり片肘を机につける。

「龍青。ここは公平に腕相撲で決めるとしよう」

「優希も片付けをしたいのか？」

「どちらでもいい。ただ、体力がある方がやるという意見は賛成だ。さっさと始めるぞ」

促す優希。

俺もそれで納得するならと勝負に応じた。

優希の手を組む。

やっぱ少女の手だ。柔らかく小さい手だ。

今思ったが女子とまともに手を握ったのって初めてだな。

もっと違うシチュエーションが良かったな・・・

勝負前に不純な考えをしていると不敵な笑みを優希と視線が合い思わず怯みそうになるが、少し手に入力準備万端の意を見せる。

「確かに人並み以上の握力はあるそうだ」

「嘘だと思ったのか？」

「・・・そうだな」

売り言葉に買い言葉。

優希の挑発に乗っただけなのだが、彼女は儂げな表情を見せた。

「さあ。準備はいい？」

怪訝に思っていると先生が手を組む俺達の上に軽く手を添える。

「一本勝負だ。手加減は無用だぞ」

「分かった」

既に優希は先程見せた表情はなく戦闘態勢に入っている。

「じゃあいくわよ。――始め！」

先生のかけ声と共に全力で勝ちに行く。

——龍青。見なおしたぞ！

——やっぱり男の子ね。宇江田君

一瞬でついた勝負に俺はこんな感じで女性達の株を上げ、地味だ、地味だと言われた（実際は誰も言っていない）人生から脱出する。それが俺の脳内に描いた展開だった。

嘘だろう。いくら力を入れても動かねえ・・・

余裕顔でこちらを窺う優希が段々と難攻不落の要塞に見えてきたよ。

「これ以上は可哀想だから終わらせてやろう」

——ダン！

俺の手の甲は机に叩きつけられた。

あまりの衝撃に手を摩り蹲る。

そんな俺に優希は胸ポケットから赤いバッジを取り出し決めポーズをとる。

「見たか。これがリーダーである私の^{マジ}実力だ！」

うぜえ。心底思った。

未だ痺れる手を摩りながら優希の腕を睨む。

「何でそんな力があるだよ」

制服で手首より少し深い所までしか見えないが、それだけでも俺の腕の方が太いと言える。

それだけの差は確実にあったのに。

「私は空手と合気道と柔道の有段者だぞ。力の使い方の一つ出来なきゃ始まらない」

彼女の説明だと純粋に腕力があるわけではないらしい。

力を十分に発揮させる技術を身につけているらしく、技術拔きの純粋な腕力勝負なら俺にも分があるそうだ。

「体力向上はヒーローの必要事項の一つだからな。これを機に体力向上も部の練習に取り入れていこう。今日はこのメモに書いてある物を買ってこい」

敗者の俺は大人しく従うことにした。

この部で俺の株は上がる所か下がる一方な気がしてきた・・・

部屋に入ると思わず声がでる。

まだ不要物はあるが、面の剥がれた卓球台やスコアボードなど比較的大きめの物は消えており隅っこを陣取っていたスペースが見えるようになっていた。

改めて見るとなかなかの広さだ。

「帰って来たか」

ゴミ捨て帰りだろう優希が後ろから声をかけてきた。

「思ったより早く片付いたな」

「ああ。部を設立する前から何を捨てるか整理はしていたからな」

本当は前もってゴミを捨てておきたかったらしいが、部室でない部屋の用具を捨てる許可が下りなかったようだ。

聞くと結構前の段階から部の設立を考えていたらしい。

「じゃあ部屋が妙に小奇麗だったのは」

「うん。道場の掃除に比べれば大した事はなかったのだが、あまり時間がとれなくてな。使用できる状態にまで結構時間がかかった」

無垢に笑う優希。

部が一步前進したことに満足しているのだろう。

俺も折角入ったのだ頑張らないとな。

「あとは小物を捨てて床の見栄えをよくすれば終わりか」

所々床のタイルが剥がれているのだ。危険ではないが生活していく上であまり雰囲気はよくない。

そう思っていたのだが優希は首を横に振った。

「いや、床はあのままでいい」

「何故・・・部費か？」

張り替えるにしても少なからずとお金にかかるだろう。
まだ設立ばかりの部に部費など与えられるはずもない。

となると暫く我慢か。

残念に思っていると優希は小さくガッツポーズしてこちらを見る。

「この荒んだ感じ。いかにも秘密基地ぽくていい」

始めは人気を避けるためにこんな部屋を選んだのかと思ったが、よく考えればもっと綺麗かつ人の目立たない部屋はあるんじゃないか？

「もしかして、この部屋を態々選んだのか？」

嫌な予感を抱きつつ訊ねる俺に優希は大きく頷いた。

「駄目元で頼んでみたら意外とすんなり通った。もう全く使わないし、片付けてくれるならと喜んで提供してくれた」

「左様ですか」

喜々と語る優希。

どこの世にこんなボロイ部屋を好む女子高生がいるんだよ。

「龍青。蛍光灯は買ってきたか？」

「買ってきたぞ」

「もう夕方だ。窓も閉める必要がある。日が暮れる前に取り換えよう」

この部屋の蛍光灯を設置できる箇所は4箇所あるが、その内の3箇所は使えない状態にあるのだ。

昼休みの時間帯ならば日の光で十分間に合ったが夕方以降はさすがに厳しいだろう。

「私はその間に残った不要物を捨ててくる」

「分かった。そういえば白菊先生は？」

「多分、ゴミ捨て場だと思う。粗大ゴミの処理は大変だからな」

「一人でやらせておいていいのか」

「大丈夫だ。麗子さんは男子生徒に人気なんだぞ」

つまりゴミの処理は先生に近寄ってきた男子諸君にやってもらっているのか。

何か不憫に思えてきた・・・人ごとじゃあないな。

俺も優希に連れて来られたようなもんだからな。

「では行ってくる。まだ話すことがあるから作業が終わっても待っていてくれ」

「了解」

優希を見届けた後、俺は蛍光灯の取り換えを始めた。

8 一開花

蛍光灯の付け替えが終わり一息つける俺。
意外と大変だった。

付け替える個所が4個所あるし、しかも蛍光灯が錆ついて苦勞した。
取り外した後、接続部分を見ると予想通り汚いわけで終わってみると結構時間がかかってしまった。

優希と先生は戻ってきており俺が買ってきたジュースとお菓子を机に並べ始めている。

「早くしろ」と無言の圧力をかけているように思えたがきつと気のせいだろう。

俺はそう願っているよ。

そんな感じで片付けは一段落つき生徒2人先生1人で昼休みに敷いた絨毯を中心に囲む。

「では部の設立を祝って乾杯だ」

優希は紙コップに注いだジュースを片手に持ち上げる。

「乾杯」

3人のコップが机の上で当たる。
ゲーム以外で積極的に動いたのは久々だ。
今からスタートなわけだが、それでもスタートラインに立てた達成感はあるのほか大きかった。

「部長さんはこれからどう活動していくのかしら？」

先生が優しく微笑みながら質問する。

「正式な活動は龍青と決めていこうと思ってますが、まずは目ぼしい部員を探しながらアレの練習をする予定です」

優希が指さすのは俺が買ってきた電卓だ。

「電卓なんて何に使うんだ？」

「『俵約部』で使用する」

「一応部活やるんだ」

「当然だ。ちゃんと部の活動をしていなければ廃部にされてしまうかなら」

部として成り立っていなければ強制的に活動停止にさせられるみたいだ。

「以前、部費を私有目的で使っている子達がいてね。それから少し厳しくなったのよ」

「ははあ」

やはり、そういう奴はいるんだな。

先生の話聞いて呆れていた。

「スーパードールな男も、スパイダーな男も皆二足の草鞋で生活するヒーローは沢山いるからな。仕方ないが我々も偉人達と同じように歩むでしょう」

「どちらも好きでそんな生活してるじゃないと思うけどな」

優希は難しそうに頷いて残念そうに言うが口元には笑みを浮かべ全く残念がっていない。

薄々感じていたが優希は形から入るタイプだな。

部室もそんな感じだったし。

目指すヒーローと同じ道を歩むそれだけで納得はしているみたいだ。

「そういう事なので、『儉約部』として儉約で使用するであろう電卓技術を学んでいく。目標は電卓検定の資格を目指す」

「それであんな玄人向けの電卓を買わせたんだな」

「あくまで目標だけだが、運良く誰かが資格を取れば部としての評価も上がるし試験には受けようと思っている」

「そんなふざけた理由で受験していると分かったら怒られそうだな」

「確かに。部の存続に響くかもしれん。絶対にばれるなよ」

「真面目に取り組むっていう選択肢はないんだな」

まあ電卓技術で生活していこうとは思っていないし真面目に取り組めないかもしれん。

「ていうかどうやって技術向上していくんだ？」

「思っていると先生がにっこり笑って手持ちのバッグから紙を取り出し俺と優希に渡す。」

「試験なんだけど。その紙に書かれているような単純な計算問題を解いていけばいいみたいよ」

俺達が見たのは3桁や4桁の乗算、除算ばかりある問題だった。電卓試験ってこんなのやるんだな。

「あとは試験じゃないんだけど、そろばん算盤みたく読み上げ算もあるみたいよ」

先生も詳しくは知らず簡単にだが調べてきてくれたようだ。
優希の身内とはいえ、こんな部を前向きに協力してくれるなんて良い先生だ。

「じゃあ試しにやってみるか？」

「今からか？」

「折角、電卓買ってきたわけだしな。一つくらい部としての活動をしてみよう」

反対する理由もないので頷いた。
部の初活動は読み上げ算となった。

・・・学校のアイドルといってもやっぱり俺は『地味』なのかな

いやいや優希もやるんだし深くは考えないでおこう。
席を2人分用意して電卓片手に準備する。

丁度いい感じの大きさだ。全てのボタンが片手に丁度収まる。
腕相撲では優希に完敗したからな。今度こそ勝って見返さなければ。
密かに気合いを入れる。

「じゃあいくわよ」

先生の声に頷くと読み上げが始まった。

スラスラと淀みなく3桁から6桁の数字を読み上げる。

かなり早く感じたがついていけない程ではない。

キーボードの打ち込みで鍛えた指捌きを今、ここで見せつけてやるぜ。

先生の声と電卓のボタンが押される音だけが部室中に響き渡る。

「ここまで」

感覚的には2、3分くらいか、先生の読み上げが終わった。
初実践にしては上手くいった方か。中々充実した時間だった。
こういった作業は結構好きかもしれない。

・・・だから地味になるのか。

「優希どうだった」

「早すぎるな。お手上げだった」

肩を竦める優希。

おお！これは勝ったんじゃないか。

「仕方ないわ。動画で聞いた速度に合わせてみたから、本番に近かったはずよ」

そうなのか？

意外そうな顔がでていたのか優希は俺の電卓を覗く。

「麗子さん。1702529で合ってますか」

「えーと・・・凄い。正解よ！！」

「おお。龍青凄いじゃないか！」

驚く2人。

いや、俺も驚いたか・・・

ふふふ、凄いな俺。こんな才能が隠れていたとは。

どうよ俺の電卓捌き！

どうよ俺の集中力！

どうよ俺の聞き取り能力！

神様なんで俺にこんな才能をよこした!!!

また『地味』スキルが伸びじゃねえか。

神様。電卓一つでどうやって世界を守るといふんだね。

この検定目指している人には申し訳ないが、もっと華やかなスキルが欲しかったです！

内心落ち込んでいると優希は肩を叩きグツと親指を立てる。

「やったな。龍青がいれば検定試験はもらったも同然だ」

確かに今の内容でレベルが高いならば簡単な検定試験ならクリアできる気がする。

なんたつて電卓スキル持ちだからな。

はっはっは。何でもかかってこいや（涙目）

優希も誇らしげに高らかに謳った。

「龍青。今を持ってお前は我が『儉約部』のエース——もとい儉約ブルーと任命しよう！」

「いらねえ！」

こうして『儉約部』の初日は終わった。

9 一拉致

『流星。今後の活動について何か案はあるか？』
『いや何も』

そもそもヒーローになる活動って何すればいいんだ。
俺の返答に優希の操るゲームキャラの女格闘家がため息をついていた。

『ふう。我が部のエースがそれでどうするのだ』

そんな風に言われたら真剣に考えざるを得ないな。

・・・ヒーローっぽい活動。

世界の平和を守るのは壮大すぎる。

じゃあ街の平和くらいならいけるか。いやまだ大きいな。
街の為に活動する。おお、この位ならいけそうだな。

・・・・・・よし。

『街の掃除とかは？』

『次、その程度の場合を出したらエースをはく奪する』

『酷い。かなり考えたんだぞ』

『どこの世にゴミ拾いするを専門とするヒーローがいるんだ！ボラ
ンティアだろうそれは』

否定はしない。

けど2人で映画や特撮で見るヒーロー達と同等のことができるかといえ
ばノーだろう。

言いたいことは分かるが限界ってのがあると思う。

『そっちは何かあるのか?』

文句ばかりなので俺は優希に聞いた。

『悪人退治をしようと思ってる』

『悪人って・・・そんな簡単に見つかるのかよ』

『当てはある。最近とある通りで学生を狙ったカツアゲを行っている不良共がいるらしい』

『犯人見つけたら警察に報告するだけだね?』

『警察?世迷いごとを・・・無論倒すに決まっているだろう。警察よりヒーローが上だということを証明してやろう』

『いやいや、いきなり実践なんて無謀すぎるだろ。不良相手に喧嘩って遊びじゃ済まされないぞ!!』

『当たり前だ。遊びでヒーローしてない。お前は私の実力を疑っているのか?』

『強いのは知ってるけど』

腕相撲完敗した俺は強く言えない。

だが女の子が不良に立ち向かうのはどうかと思う。
相手が何人か分からないのだし。

『では悪人退治は一先ず置こう。悪人よりも先にお前に私の実力を披露してやろう』

『え?』

『もう晚い。今日は落ちるぞ。明日の放課後に部室集合』

――アースさんはログアウトしました。

お父さん、お母さん、先立つ不幸を お許しください・・・

何て考えていると部室前まで来てしまった。

覚悟を決めて部室に入るが誰もいない。

まだ来ていないのか。

安堵していると背後から足音が聞こえる。

優希か？

振り向くと上下ジャージ姿の見知らぬ男が立っていた。

年は同じくらいに見えるが縦も横も体がでかく、相手は立っているだけでも威圧的に感じる。

運動部の奴かと思ったが、男の着ているジャージは学校の指定服じゃない。

「ど、どちらさま、ぐっ！」

男に要件を聞こうとしたら突如背後からロープで縛られた。

部室にもう一人いたのか。

2人は俺を部室の中央に連れていかれ用意されていた椅子に座らせる。

突如の出来事に動揺していると最初に会った男が申し訳なさそうに頭を下げた。

「宇江田さん・・・ですよね。手荒な真似してすみません。もう少しお付き合ってください」

「は？」

状況が呑み込めず頭が真っ白になる俺。

ん？縛られたロープもかなり緩いぞ。少し動かせば解けそうだ。
もう片方のロープで縛った男もまた視線だけが申し訳なさそうに
していた。

なんなんだ一体？

「俵約部のエース宇江田龍青。打ち取ったり」

俺を縛った男が突如棒読みで声を上げる。

俵約部のエースって知らない奴に言われるとすごく恥ずかしいんだ
けど！

何、1日でその呼び名広まってんの？

「後はリーダーの赤星優希。お前だけだ」

もう一人の男もまた棒読みで白々しく声を上げる。

視線は2人とも扉へと向いているので俺も合わせて見ていると、扉
の死角から何かを投げられたのが見えた。

「てい」

優希の可愛い声が聞こえた。

ヒーローは正体ばらしちゃいけないじゃなかったのか・・・バレバ
レだろ。

――パン！

「うお」

いきなりの破裂音に思わず声を上げちゃった。

力んだせいでロープも解けてしまったが、男2人は全く気にしてい

ない。

破裂した物体から煙が噴き出る。

その間に誰か（優希）が入室してくる。

「平和乱す悪党共め。お天道様が変わって私が死に花を咲かせ——」

決め台詞中に優希は俺が無事に立っているのに気付き目を見開く。

「何で助かっているんだ！」

「助からない方が良かったみたいな言い方だな——何の真似だこれは？」

男2人の黒幕が誰か察しがついた俺は白い目で優希を伺う。

つまらなそうに優希はそっぽを向くが頬が少し赤かった。

「予行演習だ」

「何の」

「いつ龍青が拉致されるか分からないだろ？」

「日本はそんなに危険な国じゃありません」

実際問題、あんな決め台詞言ってる間に完全に拉致されてるよな。

優希は残念そうに嘆息して俺の隣にいる男2人の紹介をした。

「私の道場に通っている『山岡』と『遠藤』。どちらも私達の後輩だ」

2人はバツの悪そうにだが、礼儀正しく挨拶したあと誘拐もどきについて謝罪する。

「気にしなくていいさ。優希に仕方なく頼まれたんだろ？」

何とも言えない顔で笑って誤魔化す2人。

後輩って辛いな。

自分が不利な立場になりそうな事を察したか優希は慌てるように2人を連れてきた事情を説明する。

「龍青が私の実力を疑うからな。2人を使って教えてやろうと思ったんだ」

初めからそれだけで良かっただろう。
付き合わされる身にもなってほしい。

「あと、あれを取りつけてもらった」

優希は部屋の隅っこに指をさす。

「あれって」

「見ての通りサンドバッグだ。家から拝借してきた」

「ここを第二の道場にでもする気かよ」

「ある意味近いな。だが龍青、忘れちゃいけない。ここは格闘家ではなくヒーローになる為の場所だ。ゆくゆくはここをヒーロー育成機関にする予定だ」

「その前にここは『儉約部』だ」

夢が壮大すぎるよ。というより変な方向に飛躍しすぎだ。

この先いつまで部屋に居座るつもりだ。卒業まで2年を切ってるんだぞ。

俺は後輩2人に目を向ける。

あちらも似た感想なのか多大な同情を視線でもらった。

ありがとよ。やっぱり俺は間違っただけだよな！

うん。これから優希を止めるにあたって彼らの力は是非とも欲しい。

「なあ、折角だから『候約部』に――」

「「お断りします」」

笑顔で断られた・・・

「心配するな龍青。私とお前がいれば問題はない」

「そうだね」

自信満々に答える優希に俺は優しく微笑んだ。

10 一実力

——カタカタカタカタ

「おおー」

山岡君が感嘆の声を上げる。

ふふふ、そんなに凄いかね俺の指さばき。

そうだ。電卓打ち慣れたら何かアレンジしてみるか。

ロック歌手みたく派手に動きながら計算したら・・・格好いいじゃないか！

もう『地味』から卒業する日は近いんじゃないか？

楽しみで仕方ないぜ。

「——では回答をどうぞ」

優希が読み上げ算を言い終えこちらを見やる。

俺は自信満々に答えてやった。

「374129！」

「正解！」

後輩2人から拍手を受ける。

「見たかお前達。これが『俟約部』が生んだ。エース宇江田 龍青の力だ」

優希は後輩達に宣言し、俺はガッツポーズを決める。

後輩達は生温かい視線を貰った気がするが、気分がいいので気にしない。

俺、このまま電卓で世界狙うか。

何故俺が一人で電卓の読み上げ算をやっているかと言うと、これを『俟約部』日課とすることになったのだ。

そこにいる後輩達の勧誘も失敗して未だ部員が2名。

つまり白菊先生がいなければ2人で読み上げ算ができないので、優希と交代で練習することにした。

今度は俺が読み上げを開始する。

優希よ。それじゃあ世界は狙えないぞ！

・・・軽く睨まれた気がしたので目を逸らした。
すいません調子に乗りすぎました。

そんなわけで一日一度の申し訳程度の部活を終えてから本題が始まる。

「今日は道場でもやっている基礎練習を行う。その後、私の実力を
見せてやろう」

「何やるんだ？」

「後輩達と組手をするだけだ」

ごく普通に言う優希だが、山岡君達との体格差を比べると一目瞭然。
重量級と軽量級が対戦するようなものだ。

「大丈夫なのか？」

「愚問だな。ヒーローを目指す私が空手家の一人や二人に苦戦する
はずかないだろう」

「いや、優希も空手家の一人だろう」

俺の話を無視して不満そうな声をだす。

「龍青がしっかり捕まっていれば、山岡達と流れで組手をする予定だったんだ」

「あ」

妙に納得する俺。

実力を見せるための段取りは考えてきたんだな。

やる事はずれてるけど。

「まあいいや。じゃあ俺体操服取りに行ってくるぞ」

「私が見せ場をまあいいで済ますとは酷くないか」

ここで絡むと面倒な気がしたので何も言わず体操服を取りに向った。

[illegible]

部室に4人が集まり、俺と優希、後輩2人のペアで準備運動を始めた。

さすが体育会系、普段適当にやる準備運動と違って一つ一つの動きを入念に行う。

「そのやり方は正しくないぞ。こうやるのだ」

「こ、こうか？」

「違う。こうだ」

優希が俺の間違った動作を身振り手振りで教えてくれる。

普段道場でやっていると言う一連の準備運動が終わるのに30分はなかった。

動き自体は単純なものだけど、真剣に動かすと結構疲れるもんだな。

「思ったより早く終わったな」

優希は感心して言う。

「そうなのか？」

「初めて道場に通う人は準備運動一つ終えるのに1時間くらいはかかりますよ。特に先輩の指導は厳しいですから」

優希の代わりに答えてくれた山岡君。

彼も素直に感心しているようだった。

この感じなら基礎練習もたいした事ないんじゃないか。
もしかして、こっちでもエース的な存在になったりして。

何て言って浮かれていた時もありました。

準備運動も終わりようやく基礎練習に入るのだが先に言っておこう。

ここにきて龍青の死亡フラグが成立しました♪

折角気分よく忘れてたのに・・・

練習量がハンパじゃなかった。

『候約部』の存在を隠すため部室内で可能な練習をすることになり、
まずは筋トレから始まった。

というか徹底的に筋トレだった。

序盤のうちは何とかついていけたが、中盤以降はペースが遅れはじめる。

こいつらこんなの毎日やっているのか・・・

「龍青！ヒーローとは逆境の時にこそ真価を発揮させるものだぞ」

腹筋で体を30度くらい持ち上げた所で体を震わせる俺に優希は無茶な持論で発破をかける。

だが俺も男だ。

女の子（それも美少女）に応援されて頑張らないわけにはいかない。限界の体に鞭打ってどうにか体を起こした。

見たか優希。逆境に打ち勝ってやったぜ！

優希も満足気に頷き指を一本立てる。

「その意気だ龍青。残りもうワンセット（30回）だ」

「・・・もう無理」

それを聞いた俺は横に倒れた。

後輩2人は既にノルマを達成したらしく練習はここまでになった。

「毎日こんな練習量こなしているのか」

部屋の壁にもたれかけ優希に聞いてみた。

「住み込みの門下生達はやってるな」

「それ以外の人達は？」

「向上心のある人達はやっていると思うが初心者はやらないな。型を練習するだけでそれなりに体力はつくから、そこまで筋トレに拘らない」

「俺、初心者なんだが・・・」

それ以前に門下生でもない。

「とりあえず私の実力を見せるのが目的だからな。普段やるメニューを体験してもらった」

確かに見るよりも実体験した方が過酷さは分かる。

途中でリタイヤした俺より確実に練習量の多い優希だが薄い汗をか
くだけで疲れている様子はなかった。

「ではそろそろ組手を始めるか」

物騒に微笑む優希に思わず怯んでしまった。

[illegible]

——
ド
ン
ツ

優希が山岡君の勢いを利用して華麗に投げ、床に重く鈍い音が響く。タイルが敷いてある床を剥がせばコンクリートなのだ。

始め投げれるのを見たとき危険だと止めようとしたのだが、本人曰く音が派手なだけで思い切り叩きつけないよう心掛けているらしく、2人も受け身をしっかりとっているので心配ないと言う。

それでも痛いはずだが山岡君と遠藤君は交互で優希に何度も挑む姿を見て少し安心できた。

2人とも空手なので打撃のみで応戦するが全て避けられるか捌かれて――

——ドンッ

また鈍い音が室内に響き渡る。

「そんな攻撃では相手にプレッシャーを与えられないぞ」
「はい！」

簡単に指摘して遠藤君も何事もなかったかのように立ちあがり、再び山岡君が優希に挑む。

・・・何だこの空気は
俺、疎外感を感じっぱなしなんだが。

部屋の隅で思っていると山岡君が速効やられた。

テレビで達人と名乗る老人が片手で軽く触れただけで相手が倒れたりするのを見たことあるが、今の風景はそれに近いものがある。

違いといえば今回は組手で優希も指導する気みたいなので、ある程度2人に打たせた後に隙について倒すので一瞬では勝負がつかないくらいか。

呆然と見ていると組手が終わった。

流石に2人は終わった時には疲れが見えてたが、かすり傷一つ負わなかった優希は元気一杯だ。

優希は2人に一言二言告げた後、俺の方に近づいてくる。

今の組手を見て思わずビビる俺だが、逃げる体力もないので立っているのがやっとだ。

情けねえ・・・

「どうだ。私の實力は？」

誇らしげに自慢する優希。

これだけ見ると非情に可愛いのだが。どこで間違ってしまったのだろうか？

「お、おお。凄かった。ヒーローっぽかったぞ」

この辺りが無難な返答だろう。下手うって殴られでもしたら冗談では済まない事態になりそうだ。

ここで死亡フラグの回収とかやめて欲しい。

俺、帰ったらゲームキャラのレベル最大まで上げるんだ。

・・・こんな死亡フラグの台詞って成立するのかね？

「本当か！」

俺の返答に少し頬を赤くし、子供のような無邪気な笑みを見せる。上手くいった。神はまだ俺を見捨てていないようだ。

「ふふふ、見ている龍青。本番は得物も持参するからな。不良の10人くらい一瞬で片付けてやろう」

調子づく優希。

色々と聞きたい事はあったが恐いので頷いておいた。

・・・得物って刃傷沙汰にならないよね？

11 犯人探し

ゲーム内で俺はモンスターの群れに襲われていた。

魔法使いの俺は1対1ならやりようがあるが1対多のしかも一撃で倒せない相手には逃げ回るしかできない。

森の中の道沿いを一直線に駆け抜けると俺のパーティーメンバー『Red Star』ことアースが立っている。

俺はアースを素通りして襲い掛かるモンスターを交代させた。

『天が呼ぶ、地が呼ぶ。流星、悪を倒せと私を呼ぶ!!』

知らぬ間に俺弱者扱いされてるな。トップランカーなんだぞ俺。

逃げ回ってたけど・・・

アースはモンスターの群れに臆することなく突撃した。

格闘家の彼女は拳一つでモンスターを一体、また一体片付けていく。最後の一体を倒した所で魔法で回復させてやった。

『予行練習はこんな感じだ。本番はカツアゲをする不良相手だがな』

今俺達はゲーム内で、不良達を成敗する作戦を練っていた。

作戦と言ってもほとんど優希が考えたものだが。

内容は実に単純。

俺、不良にからまれる ⇒ 逃げる ⇒ 優希が成敗

実に優希が美味しいところ取りの作戦である。

まあ、戦えと言われても勝てないと思うので結局逃げ回るだけになるだろうが。

後は優希が不良に勝てるかという一点につきる。
さすがに優希の身に危険が生じれば怪我覚悟で守るつもりだが、彼女の實力を改めて知った俺は何かなるかなと軽い気持ちでいる。
多分、不良より山岡君と遠藤君の方が体格的に断然強く見える。
その二人を優希は軽々しくあしらう事ができるのでから何とかなるだろう。

そして考えた作戦をゲーム内でシュミレーションしてみたわけだが、モンスターをおびき寄せて逃げ回っていた俺のHPは7割は失っていた。

体力の低い魔法使いの俺は足の速さも遅く、モンスターを振り切れず結構危なかった。

『俺は魔法使いなんだから前線で戦わせるのはやめよう。一つ失敗したら速攻やられるんだけど』

『流星の防御力は紙だからな。より一層良いシュミレーションになったんじゃないか？』

『今、現実の俺を罵倒したよね』

確かに紙装甲だけだな。

くそっ！何で現実世界の俺は魔法が使えない。
いらぬ個所だけ類似しなくていいのに。

『本番は不良共につかまるようなヘマをするなよ。ではまた明日会おう』

――アースさんはログアウトしました。

また言うことだけ言って落ちやがった・・・

本番に向けて少し不安な俺がいた。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

放課後。

部室に行くと今日はちゃんと優希がいた。

ごく当たり前の事なのだが何故か安堵する。

いつまた（優希の）刺客に襲われるか分からないからな。

優希は気合いが入っているようで、制服にスパッツを穿き一人サンドバッグに打ち込みしていた。

一発一発が女の子が出す衝撃音じゃない。

打ち込みを止めてこっちを見る。

「来たか龍青。早速、悪人退治の準備を行うぞ。これに着替えてくれ」

優希は袋を渡す。

何が入っているのか覗く。

「何だこれは」

「完璧だろう」

自信に満ちて声で頷く。

入っていた物を簡単に説明すると、モヒカンのカツラに、メタル系のジャケット一式。太いチェーン。

からついてくる役になった。

「もしもし。聞こえるか」

「ああ。聞こえるぞ」

携帯の番号を教えあった後、イヤホンに不備がないか確認。

初めての異性と交換した電話の内容がこれってどうなんだろう？

全くドキドキ感がなかった。

「行先は電話で指示する。まずは街はずれの公園からだ」

「分かった」

そうそうにカツアゲなんて遭遇するものではないが緊張するものだ。

「龍青」

「うん？」

振り返ると何時にも増して真剣な表情をみせる優希。

「危険と思ったらすぐに逃げてこい。私は常に近くにいるからな」

強いのは十分に知っているが、それでも女の子に助けてもらうなんて思いがどうしても捨てられない。

強がりでも女の子の前では少しでもいい格好しておきたいのだ。

無言で手を振り俺は公園に向かった。

少し歩き公園に着く。

夕方前の公園はまだ子供達が元気に遊び回り至って平和だ。

『何事もなさそうだな。次の場所に向おう』

姿は見えないが優希も不穏な箇所はないと判断したみたいだ。それから俺達は犯行があったとされる場所へと移動し続けた。

が、結局遭遇する事ができずそのまま夜になってしまった。散々歩いたせいで少し疲れてきた。

そろそろ潮時かと思い優希に電話をかけた。

『今日は終わりにしないか？』

『ふむ。腐っても悪人か。我々の正体を見破ったとみえる』
『そーだね』

かなり棒読みだが、携帯ごしならばれないだろう。

『では帰り道ついでに最後の犯行場所に向って終わりにするか』
『了解』

返事をして電話を切り、目的地に向かった。

最後の場所は車一台分しか通れなそうな細い路地だ。

人のいない夜の暗い雰囲気も相まって不気味に思える。

少し足早に歩くとポケットに入れた携帯が振動する。

俺はポケットに手を入れたまま通話ボタンを押した。

優希は振り返らないよう念を押して慎重に素早く話し始めた。

『先程から中年男性らしき人物が龍青の歩調に合わせて後ろをついてきている』

マジか！？

心臓の鳴りが早まる。

『T字路に車を確認する鏡が設置されているはずだから、知り合いだったら右に、知らない奴だったら左へ曲がってくれ。あと電話はこのまま繋いでおいてくれ』

優希が確認したかは分からないが小さく頷いた。

歩調の速度を少し落としT字路に行き着く。

目線のみ上げて鏡を見ると・・・本当についてきてる。

夜だったが電灯のお陰で多少だが人物は見えた。

少し俯いているので断定はできないが知らない人だ。

迷わず左に曲がった。

それと同時に優希の声が聞こえた。

『危険だと察知したらそのまま真っすぐ走ってくれ。先回りして走る先に向っておく』

ゲームと同じ展開になってきたな。

後ろの男もこっちに曲がってきた。

危険と感じ歩く速度を上げる。

「ま、待ってくれ」

後ろの男からだ。やや掠れた声で止まるよう求めてきた。

高圧的になると思ったが懇願するような下手にでる男の態度に足を

止め様子を窺った。

ボロボロの服装をしているな。

髭も伸ばすというよりは手入れしていないだけに見える。

男は警戒心剥き出しの俺に慌てて手を振る。

「怪しい者じゃないんだ」

説得力はない。

距離をおいて警戒する俺に歩み寄ってくる。

「に、兄ちゃん。お金・・・」

やはりカツアゲ犯なのか。

思わず息を呑み身構える。

「金を貸してくれ」

――は？

奪うんじゃないで貸す？

予想と違い呆然としてみると、おっさんは話を促しているように見えたのか一人で話始めた。

「旅行中に置引きに遭って一文無しで、電話するお金を貸してほしいんだ」

哀愁漂うおっさんは必至に訴える。

そのボロい服装、昨日今日災難に遭ってできたものじゃないだろ・・・

被害に遭ったなら警察行けよと言ってやりたかったが、必死に迫るおっさんに断ったらそれこそ危険なんじゃないかと思い、とりあえず財布の中身を確認。

10円一枚に500円一枚。

カツアゲされるの前提でここに来ていたからバス代くらいしか持ってきたなかったのを思い出した。

そんな俺を選ぶなんて哀れおっさん。
運の無い人なんだろう・・・

「電話するくらいなら10円でいいか？」

バス代を渡す事はできないので10円を見せるとおっさんは「それでいい」と頷いた。

おっさんに10円を渡すとむさ苦しい顔を近づく。

「無事家についたら礼をしたい。連絡先教えてくれないか？」

「大した事じゃないんでいいです！」

これ以上関わるとロクでもないことになりそうな気がしたので慌てて話を切り上げ俺は立ち去った。

すると少し先で疲れた表情を見せる優希が立っていた。
通話中にしていたし今のやりとりを聞いていたのだろう。

何とも言えない空気になったので、とりあえず口にしてみた。

「これってカツアゲされたって言うのかな？」

「知らん！」

優希は不機嫌そうにバス停まで歩いていった。

今日の活動報告！

浮浪者にカツアゲされた。以上！

どうしてこうなった？

11-犯人探し(後書き)

見学（前書き）

2012年の初投稿です。

本当はもう少し長めにしようと思ったのですが、前回投稿から一カ月以上空いてしまう気がしたので慌てて短めに投稿。

逃走せず最後までやりますというアピール投稿です（笑）

見学

犯人を探してから一週間経つ。

俺と優希は毎日犯人探しを行ったが結局見つけることができなかった。

結果だけみるとかなり暇人だよな。

一週間あてもなくブラブラと街中歩き回っていただけだし。

そんなわけで本日は探索を止め部室で作戦会議をすることになった。

「結局見つからなかったな」

「何を言う。治安が良いことに腹を立ててはいないぞ」

ぼやく俺を窘める優希だが、犯人を見つけれないことに苛立っていたのは彼女の方だろう。

始めの2、3日は躍起になり、成果が上がらないと毎日子供のようにぶすつと頬を膨らませていたのだから。

その後は考えかたを切り替えたのか、成果が上がらずとも平和は良いことだと自分に言い聞かせていた。

多分、内心は諦めの境地なのだろう。

「この一週間成果らしい成果といえば浮浪者に会ったくらいか」
「何のことだ。この一週間は実に何事もない平和な日々だったじゃないか」

実に清々しい顔で言う。

彼女の脳内にはあの件に関して無いものとされているらしい。

「そんな妄想はさておき次の計画を考えようじゃないか」

「妄想とはなんだ。俺の10円は犠牲になったんだぞ」

10円を仲間と呼ぶ俺はなんか痛い気がしたが、ヒーローを目指す優希には言い方が効くのではないかと思ひ仲間の尊さを説いてみた。少し怯んだ表情を見せるが無理に平静を装い遠い目でどこかを見つめる。

「自己犠牲。平和を守るには自らの命を犠牲にすることもあるだろう。お前の10円は立派な英雄だった」

「やっぱり覚えていたじゃないか！」

「あ・・・違う。あくまで龍青の妄想の話だ」

あくまで認めない優希。

どこかの政治家みたいだ。

「で、これからどうするんだ」

俺も面倒になってきたので話題を変えることにした。

こうして儉約部の英雄が闇に葬られた瞬間である。

さらば英雄強くこの世で生きてくれ。

「この件は何か情報を得るまで手を引くことにする」

「そうだな。これ以上意味なく歩き回るのは遠慮したい」

ここ数日同じルートを優希との電話で独り言のように歩き回りまわった結果ちよつと白い目で見られ始めていた。

俺の心の傷が深くなる前に終わってくれるのは助かる。

「ということで、本日はデパートに行くぞ」

「また何か買い出しか」

「部費がないのだ。買い出しなどできる訳ないだろう」

前回は白菊先生が自腹だったらしい。

優希にそれを聞かされた時は驚いたが、少し考えれば当然だろう。まだ結果どころか、まともに活動もしていない部に部費を出すわけがない。

優希は一枚のチラシを見せる。

3人のヒーローがポーズをとっている絵だった。

本日デパートの持つ小さな公園でこのヒーローショー開催されるらしい。

受け取った俺は中身を確認した後、恐る恐る聞いてみた。

「まさかこれ見にくのか？」

「そうだ。参考になるかもしれないぞ」

絶対に自分が見たいだけじゃないかと思ったが、久しく見ていないヒーローショーに懐かしみを覚えた俺はため息を交じえながら頷いた。

[illegible]

決まれば早い。

早速俺達はテパートへ直行するが、その間優希は平静を装いながらもそわそわしているのが見て取れた。

よほど見に行きたかったらしい。

「よく見に行くのか？」

そわそわしている優希を見ているとこっちまで感染してしまいそう
で気を紛らわせた。

「小さい頃はよく見に行ったが、最近あまりやらなくなっ
てしまったからな」

懐かしみながらも少し寂しそうに話す優希。

確かに流行りではなくなってしまったからなあ。

今でも定期的にやっている場所もあるみたいだがデパートでやるの
は減ってしまっただろう。

「行く度に悪人にさらわれる役になりたいと思っていたな」

「俺は舞台に上るのが恥ずかしかったから選ばれないでほしいと願
ってた気がする」

「悪に背を向けるとはヒーローにあるまじき行為だぞ」

「その頃は俺ヒーローじゃないし」

まあ今もだが。

「私なんかいつ襲われてもいいように見に行く時は常に武器は持参
していたぞ」

誇らしげに胸を張る優希。

小さい頃の優希を想像しながら微笑ましく思うも、その頃から戦闘
意欲が高かったんだと実感させられた。

地球人じゃなくて、どこかの戦闘民族として生まれればよかったの
にね。

「安心しろ龍青。今日はヌンチャクを持参してきた。安心してさら

われるといいぞ」

「何に安心しろと！」

今更ながら不安になってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2536z/>

お前に英雄教えてやる

2012年1月10日01時50分発行